

## 定住化したケニアの牧畜民による蜂蜜利用の変容

---

ケニア中西部からウガンダにかけて、ポコットという民族の居住地が広がっている。このうち、西部の標高の高い湿潤な地域で、おもに農耕をおこなっているポコットは、西ポコットと呼ばれる。一方、東部の標高の低い乾燥した地域で、おもに牧畜に従事しているポコットは、東ポコットと呼ばれる。本研究が対象とするのは、後者の東ポコットである。

1980年代以前には、隣接する牧畜民との家畜をめぐる抗争や、家畜の数少ないえさ場と水場へのアクセスのために、調査地のポコットの人びとの移動性は高かった。しかし、1990年代以降、調査地域の安全性が高くなったことや、ため池などの水場の整備がすすめられたことで、人びとは徐々に、水場や食料品店、学校の近くに定着するようになった。従来、家畜由来の食料（ミルク、血、肉）に強く依存していた食生活は、家畜を売却して得た貨幣で農産物を買うように変化していった。つまるところ、食の基本であった家畜群と、消費者（人間）の居住を、分離することが可能になるようになっていった。えさや水を求めて長距離移動する家畜群に追従する必要がなくなり、えさと水が不足する乾季には、定住したホームステッドから家畜群と牧童だけを遠方へと派遣して放牧させるようにもなったのである。

定住化し、牧畜にたずさわる時間を徐々に減じさせるのと同時に、人びとは生業を多角化させることで、より貨幣経済に適応していくようになった。商店の経営や、輸送業、建築業などの業種が小規模な町で活性化し、薪や水、建材なども現金で売買されるようになっていく。町や交通網の整備とともに、家畜市の規模も拡大していき、人びとは容易に貨幣を手にするようになっていく。さらに、学校教育を経ることで、役人や教師、医師などの職業へ進んで成功する事例も見られるようになった。

このような「生業の多角化」という大きな変化の一部に、養蜂業の進展というものがある。従来の蜂蜜は、甘味食料・嗜好品・儀礼用食品としての用途しかなかったが、貨幣経済の進展とともに蜂蜜商人が市に現れ始めると、蜂蜜の貨幣稼得手段としての側面が大きく認識されるようになっていった。人びとは収量の増加（すなわち、売却量の増加）を目指して、巣箱の数を飛躍的に増加させる一方、蜂群を損ねないような採蜜が意識されるようになっていく。近代養蜂の知識によると、収蜜量を維持するうえで、採蜜時に働き手の蜂の数を減らさないこと、巣作りに費やすエネルギー量を考慮して巣脾を奪わないことは、非常に重要なポイントである。しかし、もともとポコットの人びとは、すべての巣脾と蜂蜜を奪っていく、いわば「掠奪的な採蜜」をおこなっており、蜂群の離巢を恐れなかった。それは、人びとの移動性が高い時代に、蜂群を巣にとどませ続けても、管理できるわけではないがゆえの慣行であったともいえる。しかし、人びとが定住して移動性が低くなることで、同じ巣を何度も訪れることが可能となり、巣箱の管理も容易になっていった。それにつれて、人びとも蜂群の離巢の不利さに気づいていく。巣脾、および蜂児の保護を意識するまでには至っていないものの、この15年ほどのあいだ、人びとは、採蜜時に少量の蜂蜜を残して蜂群の離巢を防ぐ試みを、徐々にするようになっていく。蜂蜜を残す、ということは、蜂蜜が含まれる巣脾と、巣脾に含まれる蜂児も、ある程度残すということを意味しており、巣脾の再築にかかるエネルギーや、蜂群を維持するためにかかる時間を節約していることになる。このような採蜜時の慣行の変化は、人びととミツバチの関係のどのような変化を表しているのだろうか。また、調査地のミツ

バチはアフリカミツバチであり、移動性が高いといわれている種である。人びとが定住できるようになった環境の変化（水場の整備、市場を経た食料へのアクセス）などが、ミツバチの移動習性にも影響を与えている可能性も、ポコットの人びとからは指摘されており、これまた人びととミツバチの関係の変化を探るうえで興味深い。こうした点については、澤田（1986）によるヒトとハチの関係の諸類型を参照しながら、検討していくつもりである。

調査地は、調査者が2011年以来調査を続けてきたケニア共和国バリング県タングルベイ地区、およびその北方約20kmに位置するウルス地区である。

人口が2,000人ほどのタングルベイ地区では、人びとの定住性が顕著になり、子どもたちは学校へ通い、日々、家畜群が牧童なしで自律的に遊動することが当たり前になっている。町の近郊では、トタン屋根の家屋や石壁づくりの家屋が目に見えて増加し、定住に対する人びとの意思を明確に示しているし、人びとは、小さな町の食料品店で食料を購入するとともに、その品目も多様化している。

一方、人口が500人ほどのウルス地区では、同様に定住が進んでいるとはいえ、まだまだ草ぶきの伝統的な家屋が多く、人びとは移動の可能性を捨てきれずにいる。実際に、家畜群の放牧環境の良し悪しや、人や家畜の死亡などを理由に、現在でも少なからず、ホームステッドを短距離移動させている。食料も食料品店で購入しているとはいえ、その品目もトウモロコシ粉と砂糖くらいに限られており、食の基本は家畜のミルクであるというのも、家畜への依存度を示している。

ミツバチの巣箱については、両地区の面積当たりの巣箱の数にそれほど違いはないものの、個人ごとの平均所有巣箱数は、ウルス地区が圧倒的に多い。タングルベイ地区の人びとが持つ巣箱の多くは、行政が実施したプロジェクトで配給された巣箱や、購入した巣箱、少年たちが作った簡易な巣箱であるのに対して、ウルス地区の巣箱は青年たちが木の幹をくりぬいて制作したものが大半である。ウルス地区では牧畜以外の生業がある程度限られており、時間とエネルギーを巣箱づくりに投じられるというのが、その主な理由のようである。

これら2つの地区における調査を報告しながら、上に記したヒトとハチの関係に関する考察を発表する。



樹上に設置された巣箱



巣を離れる分蜂群